

# 巻頭言

## 「新しい年を迎えて」

理事長 新谷 友良

明けましておめでとうございます。皆さま、良いお年を迎えられたことと思います。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

昨年は障害者権利条約の批准があつて、いろいろなところで「条約の批准があつたのだから…」という言葉を目にします。「障害」とか「権利」といった言葉は決してこなれているとは言えませんが、普通の会話に抵抗なく出てくることは歓迎すべきことで、「共生社会・インクルーシブな社会」への歩みを着実に進めていきたいと思ひます。

昨年 11 月の「聴覚障害者コミュニケーション教室」で精神科医の上野秀樹先生に「認知症の人とコミュニケーション」というテーマで講演をいただきました。2年続きの企画です。認知症の方は平成 25 年度で 462 万人、その予備軍が 400 万人、そして 65 歳以上の人の 4 人に一人は認知症かその予備軍といわれています。聴覚障害者の数、年齢構成と非常によく似ています。

上野先生は認知症の症状について、わからないことの連続が本人を「不安と混乱」に陥れ、家事や仕事の失敗が「自尊心の喪失」を招き、現実の世界についていけないことが「焦慮と恐怖」をもたらし、その結果自分自身が壊れていくと説明されていました。そして、誰もが高齢になると認知症になる可能性があり、「認知症を恐れるのではなく、認知症になってもいきいきと生活できる社会を作ることが認知症に対するケア」と話されていました。また、アメリカの心理学者であるケリー・マクゴニガルという人の「ストレスを友達にする方法」を紹介されて、友達や近所の人を助けるために使った時間が多い人の死亡率が格段に低いことから「人を助けることがその人に回復力をもたらす」ことを強調されました。

共生社会という言葉は耳に入りやすい言葉ですが、その中身は？と聞かれるとなかなかまい答えが頭に浮かびません。しかし、上野先生の話にあるように、人は人とのかわり合いの中で生きています。それが多くの場合ストレスの原因になるのですが、逆に人を助ける（共助）ことがストレスからの回復をもたらすものであるなら、共生社会の実現は私たちが生き延びていくための生き物として否応なしの知恵のような気がします。